

論文

日本のエイジズム研究における研究課題の検討

—エイジズムの構造に着目して—

朴 蕙彬[†]

要約：本稿の目的は、エイジズムに関する文献のレビューを行うことである。まず、先行研究の全体的な傾向を把握する。次に、エイジズムの構成要素を分析の枠組みにして日本のエイジズム研究の成果と課題を明らかにする。分析の結果、従来の研究の成果として多様な個人がもつエイジズム意識に関する基礎的データの蓄積が浮かび上がった。しかし、エイジズムに関する理論的考察が不十分であり、おそらくそれゆえに研究の焦点が心理的側面にもっぱら向けられる傾向があり、社会や文化などとの関連性には向けられていない傾向を発見した。これらの結果から、今後、エイジズムの理論的考察を深めるとともに、社会文化的要素を含めた包括的な研究枠組みを構築することが求められていると考える。

キーワード：エイジズム、高齢者に対する態度、ステレオタイプ、偏見、差別

目次

1. なぜエイジズム研究なのか
 - 1-1. 何を問題とするか
 - 1-2. エイジズムの理論枠組み
2. 研究の目的と方法
 - 2-1. 研究目的
 - 2-2. 研究方法
3. 文献レビューから明らかになったこと
 - 3-1. 研究の全体傾向
 - 3-2. 得られた研究の成果
 - 3-3. 残された研究課題
4. 考察

1. なぜエイジズム研究なのか

1-1. 何を問題とするか

日本社会において高齢者はどのような待遇を受けているのか。高齢者一人を扶養するために現役世代の負担が増えることを計算した図が新聞をはじめとするメディアで用い

[†]同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程

*2017年12月5日受付、査読審査を経て2018年1月5日掲載決定

られて久しく、これは社会や経済の負担を重くする原因として高齢者を取り上げている典型的な例である。また、高齢者は交通事故を起こしやすいため運転免許の更新基準を厳しくし運転免許の返納をせまられており、高齢者への虐待やそれによる殺人事件が発生している。これらのことは、今、高齢者が直面している待遇の問題である。

このような待遇は、高齢者を問題の原因として取り上げた上で、高齢者に問題を起こさせないために排除することにつながる。例えば、前述した高齢者から運転免許を取り上げようとするのは、彼らの移動や社会生活の手段を一つ減らすことであり、まさしく排除なのである。

なぜ、高齢者はこのような待遇を受けざるを得ないのか。これに関して、高齢者に対する私たちの考え方から、それによる行動、制度やシステムまでを検討する必要がある。その際、社会的存在として人間が高齢期をいかに生きているのかを問う必要がある。つまり、高齢者は社会に働きかけられつつ生きる客体なのか、社会に働きかけつつ生きる主体なのかということである。

この問いに関して、老年学はどのようなアプローチを行ってきたのか。高齢者本人が主体的に生きることを意味するサクセスフル・エイジング (Successful Aging) やアクティブ・エイジング (Active Aging) という概念がある一方で、高齢者を客体として捉えた社会 (他者) の見方を現すエイジズム (Ageism) という概念がある。前者は理想として掲げられそれを達成するための研究が行われるが、後者のエイジズムは年齢が人の価値や能力を決めつける役割を果たしていないかを問う際に有効である。

エイジズムは「老化が人々をより非魅力的で、より非性的で、より非生産的にするという信念に基づいた、高齢者に対する偏見と差別」(Wilkinson & Ferraro 2004) であり、「身の回りに老人がいることを一切のぞまないこと」(オズグッド 1994) とまで見る見方もある。すなわち、エイジズムは社会から高齢者を排除することである。

これらを踏まえて本稿は、高齢者が社会から排除されていることを問題とし、エイジズムが高齢者の社会的排除を含むあらゆる場面における排除の原因であるとする。エイジズムは 1961 年に提唱されており、概念生成後にかなりの時間が経っているにもかかわらず未だに解消されず、前述のように高齢者は排除され続けている。よって、筆者の研究関心はエイジズムを克服すべき問題とし、なぜエイジズムが存在し続けるのかを明らかにすることである。

1-2. エイジズムの理論枠組み

エイジズムは、1961年にアメリカ国立加齢研究所 (NIA: National Institute on Aging) の初代所長であるバトラーが作った言葉であり、今日では、レイシズム (racism)、セクシズム (sexism) に次いで第3の差別として位置づけられている。さらに、日本を合

む諸外国でも社会の高齢者に対する偏見と差別問題を論じる際に重要な概念として用いられている。ここでは、最も多く引用されるエイジズムの定義や構成概念を整理し、エイジズムの理論枠組みを提示する。

バトラーはエイジズムについて「ある年齢集団が他の年齢集団にもつ偏見」とした上で、「レイシズムやセクシズムのように年をとったことを理由とした組織的なステレオタイプ化や差別のプロセス」と説明している（バトラー 1991:9-19）。一方、パルモアはバトラーの研究結果に加えて、エイジズムについて「ある年齢集団に対する偏見や賞賛・利益」として、肯定的なエイジズムにも注目した。パルモアが提示した肯定的エイジズムには、高齢者に対して「親切である、知恵がある、頼りになる、裕福である」などといったような固定観念をもつこと、高齢者に対する割引を行う諸制度、アメリカのメディケア（高齢者を主な対象とした医療制度）などがあげられている（パルモア 2002:43-100）。

しかし、一般的にエイジズムという場合には否定的な面に注目されることが多く、前述したように、エイジズムは「高齢者に対する偏見と差別」として捉えられている。特に、日本では、エイジズムをカタカナで「エイジズム」と呼ぶことも多いが、高齢者差別と訳されることも少なくない。これまでエイジズムを取り上げた多くの研究はエイジズムの創始者であるバトラーやエイジズム研究を発展させたパルモアの研究に依拠した定義を用いている（松岡 1999, 山田 2003, Nelson 編 2004, 鳥羽 2005, 杉井 2007）。これには、エイジズムがアメリカで作られた概念であるため正確な意味を把握することが容易ではない点、エイジズムそのものの構成要素が多様なうえ複雑である点、概念の範囲が広義にも狭義にも捉えることができるため統一した概念の定義がない点、などが理由として考えられる。

このように、エイジズムは偏見、差別の面が強調されがちであるが、それを生じさせるステレオタイプ化された考え方、見方までをも含む概念である。従って、本稿では、エイジズムを前述の概念全体が含まれた「高齢者に対する態度」とする。以下では、態度としてのエイジズムの構成概念の定義と相互の関係を論じ、それをエイジズムの理論枠組みとする（図 1）。

社会心理学では、態度を認知、感情、行動の三つの要素から構成されるとした上で、以下のように説明している（アルポート 1968, ブラウン 1999, Aronson ら 2013, 池上 2014）。

まず、認知レベルのステレオタイプは、定型的あるいは審判的な信念や期待の認知として理解されている。ステレオタイプは偏見や差別の根底にあるものとして想定されており、偏見を妥当化・合理化させる役割を果たす。次に、認知を踏まえて、感情レベルの偏見が生じる。偏見は、ステレオタイプに基づいた否定的な感情や行動意図であり、

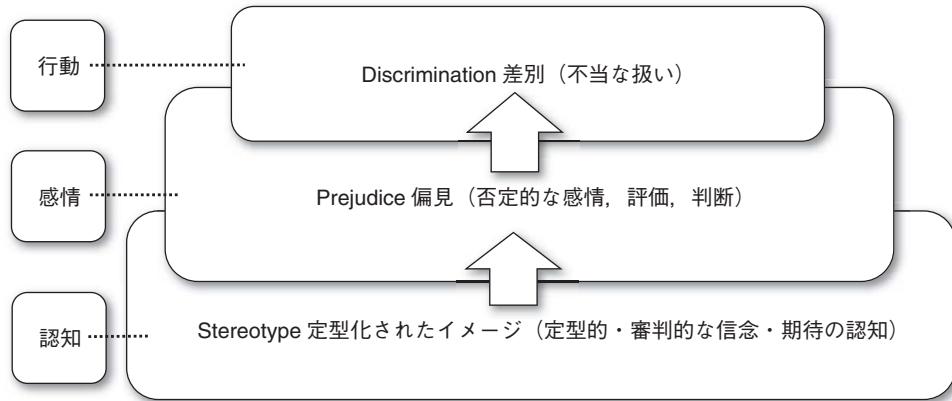


図1 エイジズムの構成概念図

出所：パトラー（1991）、パルモア（2002）、ronsonら（2013）、池上知子（2014）より筆者作成

判断として捉えることができる。最後に、行動のレベルでは、対象となる集団やその構成員に対する直接的または間接的な差別、不当な扱いが含まれる。

上述の内容を「高齢者＝弱い」というイメージを例にして説明すると、まず、「高齢者は弱い」と思い込むことを高齢者に対するステレオタイプとして想定することができる。偏見は、「高齢者は弱い」というステレオタイプに基づいて生まれる「高齢者は仕事には向かない（だろう）」といったような感情・判断のことである。これらの思いや評価の結果（行動）として、高齢者を保護される存在とみなし高齢者の労働参加権を制約し、労働から排除するという定年（引退）制度が生まれる。

以上のように、ステレオタイプから偏見を経て差別につながる流れは、仮説的なものではあるが、上述したようなエイジズムの存在と高齢者に及ぼす影響についてはすでに研究されている。パルモア（2002：22-26）は、定年退職制度をエイジズムの例として取り上げて、この制度による経済・社会・文化的損失について論じている。また、Nelson（2004）、Applewhite（2016）はエイジズムが高齢者にQOLの低下、能力を発揮する機会の喪失などといった心理的・身体的な悪影響を与えていることについて論じている。

2. 研究の目的と方法

2-1. 研究目的

前章でも述べたように、筆者の研究関心はエイジズムがなぜ存在し続けるのかを明らかにすることである。これを達成するためにはそもそもエイジズムがいかに研究されてきており、今後どのように研究を進めるべきかを検討する必要がある。その際、従来の研究を参考に将来の研究で取り組むべきことを導き出すための文献レビューは欠かせな

いものである。したがって、まず、これまでの研究内容を分析し、そこで明らかになったことと見落とされている内容を明らかにする必要がある。すなわち、エイジズム研究を発展させるための次のステップの研究課題を明らかにすることである。

以上のことから、これまでのエイジズムに関する文献のレビューを通して、エイジズム研究における課題を検討することを本稿の目的とする。文献レビューを通して、エイジズム研究における問題関心やその変化の把握、研究方法を概観することができる。得られる結果としては、日本におけるエイジズムに対する認識とその傾向、不足している学問分野および方法を明らかにすることが想定される。

2-2. 研究方法

本稿では、前述のエイジズムの構成概念をもとに、これまで日本のエイジズム研究がどの部分に注目してきたかを分析する。その際に、用いる文献は以下のような手順で選定した。文献の選定に用いたデータベースは CiNii Articles であり、検索結果の最終確認は 2017 年 4 月 11 日に行った。キーワードを「エイジズム」にして検索したところ 91 件がヒットした。さらに、これらの対象文献の検討およびハンドサーチした結果、「エイジズム」と明記していないが類似の研究を行っている場合もあるため、以下のようなキーワードで検索を行った。「年齢差別」「高齢者観」「高齢者」「老人」「差別」「偏見」である。検索の結果、「年齢差別」が 158 件、「高齢者観」が 86 件、「老人観」が 90 件で、「高齢者」「老人」と「差別」「偏見」を用いた検索を行った結果 187 件の論文が検索された。このうち重複したもの、資料、総説・解説、エイジズムと直接関連のないものなどを除いた結果、最終的に検討の対象として 32 件の論文を得た。

3. 文献レビューから明らかになったこと

ここでは、第一に、研究の全体的な傾向の把握として、先行研究におけるエイジズム定義からみる問題関心、学問分野、研究目的と方法を分析する。さらに、前章の図 1 で提示したエイジズム構成概念を分析の枠組みにし、以下の 2 点を明らかにする。

第二に、日本のエイジズム研究の成果として、調査や研究から明らかにされたエイジズムの特徴とエイジズムに影響を及ぼす要因を分析する。

第三に、残された研究課題を先行研究で指摘された研究課題から分析する。なお、対象とした文献の研究目的、方法、内容を整理したものが表 1 である。

3-1. 研究の全体傾向

日本のエイジズム研究は 1999 年から本格的に行われるようになった。それは、パル

表1 先行研究レビューの結果

	著者	研究目的	内容 (主な研究結果)
	学問分野	研究方法	
1	・松岡 (1999) ・教育	・エイジズムの意識化と超克を志向する総合的活動のビジョンと構想を論究 ・理論・文献	・エイジズム学習のメタモデル: ①高齢者エンパワーメントモデル (市民運動モデル) ②対話モデル (交流を通してエイジズムを批判的に検討し共同で文化行動を展開) ③ネットワークモデル (異質な集団とネットワークし開き込みやエイジズムの意識化) を提案→有効なモデルとして③ネットワークモデル
2	・奥山 (1999) ・心理学	・ステレオタイプとしてのエイジズム (高齢者像) に注目し日本の特徴を分析 ・大学生に FAQ	・エイジズムの原因: 個人的要因, 社会的影響, 文化的要因 (バルモア論) ・日本はタテマエとして敬老思想, ホンネとして軽蔑意識や無関心が共存
3	・池田 (2001) ・社会学	・アメリカの反エイジズム思想を歴史的コンテキストの中で検証, 老いの意味を考察 ・理論・文献	・エイジズムと反エイジズムはどちらも若さの価値が大前提となっており, 「若々しい老い」が老年期の理想とされていることを批判 ・あるべき姿として健康な老人, 若々しい老人, 老人らしくない老人が規範化されている
4	・小川 (2001) ・看護学	・老年看護学の教育内容検討 ・看護学生に FAQ	・老年看護学学習後 (3年生) に否定的偏見が強くなった (誤答の増加)
5	・鳥村 (2002) ・社会福祉	・日本人の老人観をレビューし, 大学生が抱いているお年よりイメージを分析 ・質問紙, 高齢者イメージの自由記述	・学生個人の高齢者との関わり, メディアが高齢者イメージの形成に影響
6	・小松 (2002) ・女性学	・アメリカ, 日本のエイジズム研究概観を通して, 男女差別やジェンダー問題への新たな取り組みの手がかり模索 ・理論・文献	・90年代: エイジズム研究の英語の本が翻訳され, 日本のエイジズムの本格的専門書 (日本人による) 出版
7	・山田 (2003) ・社会福祉	・20世紀後半アメリカにおける高齢者の社会経済的地位の克服にエイジズムが果たした役割, それに対する公民権運動の思想的関与を吟味 ・理論・文献	・偏見と差別過程の克服するために①高齢者の主観的評価 (自己イメージやセルフエスチーム) と客観的指標 (生活実態), ②社会の高齢者観研究, ③社会の高齢者待遇実践内容の検討が必要
8	・吉田 (2004) ・人文科学	・エイジズムとセクシズムを用いて高齢社会における新たな人間像・社会像創設への課題の可視化 ・理論・文献	・老化→加齢, 老人→高齢者というパラダイム転換が必要 ・多様な高齢者像創設が高齢社会の新しい生活創造の基本的課題
9	・南 (2004) ・社会福祉	・エイジズムの意味論述, 大学生の意識調査 ・FAQ	・過去の調査結果と3大学に行った調査結果, 否定的偏見スコアが肯定的偏見スコアより顕著に高い傾向
10	・原田ら (2004) ・老年学	・日本語版 FSA 作成 ・都市部 25-39 歳男性に調査	・FSA (誹謗, 回避, 差別) を用いて日本に適用できる尺度として検証→嫌悪・差別, 回避, 誹謗の尺度
11	・鳥羽 (2005) ・社会福祉	・日本の高齢者観の変遷, エイジズムの現状と課題考察を通して, 社会福祉専門職や援助実践に及ぼす影響と課題を検討 ・理論・文献	・日常的に障害高齢者と多く接する専門職が否定的偏見を持ちやすい傾向があることを自らがよく認識すること, 時代に即した高齢者に関する正確な知識を多く持つことが重要 ・教育養成課程においては, 健康な高齢者像, 高齢者の多様性という側面における知識や体験を増やすことができるような内容を多く盛り込むべき
12	・浅田 (2006) ・法学	・アメリカにおける年齢差別問題を取り上げ, ADEA (Age Discrimination in Employment Act, 1967) から導かれた「年齢差別禁止ルール」を憲法解釈論として構成 ・理論・文献	・反エイジズム: ステレオタイプが高齢者に対する敵意・偏見の基盤, 高齢者を個人として取り扱うべき ・ステレオタイプが高齢者の職務遂行能力を推定するが, 年齢ではなく能力に基づいて処遇すべき ・だれもが高齢期を迎えても, 自己の生き方・人生を自らがコントロールできる機会を奪われず, 自身の潜在能力が適正に評価される処遇の重要性を指摘
13	・三澤ら (2006) ・看護学	・高齢者イメージに関する学生の自由記載内容の分析 ・自由記述, KJ 法	・祖母との同居体験が女子学生の高齢者イメージに影響 ・看護学生の高齢者イメージは身体的健康に包括されるカテゴリーが多い ・自由記述結果のイメージの中にエイジズム (頭が固い, 無気力) が存在
14	・松尾ら (2006) ・社会福祉	・高齢者福祉施設職員がもつ高齢者観分析 ・FAQ, 日本語版 FSA	・老いに対するイメージ (高齢者や老いについての感情面), エイジズム (老いや高齢者に対する態度や行動面) ・エイジズムが高い人ほど高齢者に対する否定的なイメージが高くなる

15	・清水 (2007) ・看護学	・看護学生への高齢者へのかかわりにおける対話の問題と特徴解明 ・質問紙, 自由記述	・エイジズムの影響としてかかわりへの戸惑い・懸念・偏見・困難さの4因子 ・否定的感情や不安はあるが高齢者への関心がある(関わりとうとする態度)
16	・杉井 (2007) ・社会学	・虐待を未然に防止する意図からエイジズムの構造解明 ・40歳以上男女に日本語版 FSA	・因子分析結果: 忌避・拒否感, 蔑視, 迷惑, 無視, 他人事・無個性 ・高齢者, 病弱者による自己排除と差異化 ・男性, 強者(高学歴, 生活にゆとりある)による差別・排除がみられる
17	・原田ら (2008) ・老年学	・若年男性におけるエイジズム関連要因の仮説検証 ・都市部 25-39 男性に日本語版 FSA	・親族・仕事上の関係において高齢者との接触機会が少ない, 加齢の事実を知らない, 老後生活に対する不安感が高いほどエイジズムが強い ・満足度・不安感仮説は誹謗に対する老後不安感の影響が確認
18	・関根 (2009) ・社会福祉	・生産性から脱却した成熟主体としての高齢者観について考察 ・理論・文献	・先行研究レビュー, エイジズムの要因整理(アメリカ) ・日本のエイジズムについて高齢者観として文献検討 ・高齢期のとらえ方として客体ではなく主体性に注目する必要を主張
19	・田洪 (2009) ・看護学	・老年看護学の教育展開を考察 ・質問紙, 自由記述	・高齢者に対する否定的な固定観念があり, 高齢者への援助実施の意欲とそれに抵抗感がある学生はほぼ同数 ・赤ちゃんの気持ちを描写した説明文を高齢者と認識する学生が多い
20	・関根 (2010) ・看護学	・日本のエイジズム構造, 年齢階層ごとの要因と影響力を検討 ・地方都市 20-75 歳男女に日本語版 FSA	・若年層: 健康状態・老後不安感・自尊感情, 中年層: 地域関係・加齢意識・自尊感情, 老年層: 地域関係・自尊感情がエイジズムと有意な関係 ・嫌悪, 拒絶・回避, 偏見が日本のエイジズム構造の特徴
21	・佐野ら (2010) ・看護学	・実習前後における高齢者の知識の理解, エイジズムの関連・変化を検証 ・日本語版 FSA, FAQ	・高齢者とのコミュニケーションはエイジズムを弱くする効果がある
22	・牛島 (2011) ・教育学	・エイジズムに気づかせよう生きていくかを考えるような教育方法の検討 ・教材開発	・エイジズムに関する意見交換, 議論によって学生に考えさせることができた一方, 提示するエイジズムの事例選定に困難(高校生を対象に)
23	・佐野ら (2011) ・看護学	・実習前後におけるエイジズムの変化を分析 ・日本語版 FSA	・学習, 高齢者類似経験, 関わりや対応の体験が偏見や先入観の低下に ・親密さの形成, 個人の高齢者への理解や関心が高まることによってエイジズム低下
24	・久木原ら (2012 A) ・看護学	・高齢者ケア職員のエイジズムと職業性ストレスの関係と要因を検証 ・日本語版 FSA, スレッサー評価	・エイジズムは学歴, 職歴, 職業性ストレスと関連する ・エイジズムは誹謗, 回避, 嫌悪・差別の順で高い
25	・久木原ら (2012 B) ・看護学	・高齢者介護施設職員におけるエイジズムの実態把握 ・日本語版 FSA, FAQ	・誹謗の得点が差別, 回避の得点より高い ・勤務年数 10 年以上群が未満群より誹謗の得点が高い(より否定的)
26	・久木原ら (2013) ・看護学	・エイジズムに関連する要因を検証 ・高校生に日本語版 FSA	・高齢者との交流の機会(嫌悪・差別, 回避の項目)やボランティアの機会(回避項目)があるほどエイジズムが弱い
27	・石井ら (2015) ・心理学	・感染症脅威が高齢者に対する偏見の増加に及ぼす影響を検証 ・大学生, 看護学生に日本語版 FSA	・高齢者との同居・接触経験は感染症脅威の高齢者偏見への負の影響を軽減させる要因
28	・関根 (2015) ・社会学	・エイジズムの規定要因(エイジズムと社会関係, 家族関係との関連性)の解明 ・40歳以上男女に日本語版 FSA	・日常的に親密に付き合っている人が多く親しい人と接触頻度が高い人, 積極的に参加・活動している所属団体がある人, 夫婦関係が良好である人, 配偶者の能力や努力を評価し評価される人ほどエイジズムが弱まる
29	・手島 (2015) ・社会福祉	・歴史, 法制度や国際比較調査に見られる高齢者観を概観し, エイジズムが高齢者に与える影響を考察 ・理論・文献	・高齢者に対して, 敬老思想に基づいた知恵と経験豊富な見方から生産性に乏しく社会的弱者としての捉え方に变化 ・いずれも高齢者を排除する傾向
30	・御園ら (2016) ・老年学	・高齢者に性に関する知識の検証 ・30-59 歳男女に高齢者の性に関する知識と態度スケール	・年齢, 高齢者との接触程度, 性別, 就学年数などとの関連性を検証 ・老親と同居している人, 女性は高齢者の性に関する理解・情報が乏しい
31	・石井ら (2016) ・心理学	・感染症脅威が高齢者に対する潜在的(非意識的)偏見に及ぼす影響を検証 ・準看護学生に FUMIE テスト	・感染症脅威による偏見への影響が生じる ・職業アイデンティティの強い者は感染症脅威の影響が消失
32	・二木ら (2016) ・心理学	・両面価値的なステレオタイプの顕著さが実体性を調整するかを検討 ・大学・大学院生にステレオタイプモデル, 実体性, 感情・行動意図	・実体性(高齢者を個人としてみる)を下げることによって能力が低いというステレオタイプが低減できる可能性を示唆 ・研究結果をメディアにおける報道内容に応用可能(ステレオタイプの低減方法として示唆)

出所: 筆者作成 (対象論文は参考文献に掲載)

モアやバトラーの文献が90年代に翻訳され紹介されるようになったことがその背景にある。また、高齢社会対策関連の調査報告が出され、日本人によるエイジズム関連の研究結果が出版されはじめたのもこの時期である（小松 2002:33）。

以下では、エイジズム研究の問題関心、学問分野、研究目的と方法についてその全体傾向を確認する。まず、先行研究の問題関心、つまり、エイジズムのどの側面に注目して研究を行っているかについて分析する。本稿で対象にした32件の文献におけるエイジズムの定義は、「高齢者差別」、「年齢差別」が最も多く、多くの研究においてエイジズムを高齢者・年齢差別として認識していることがわかった（27件）。定義について述べる際に、根拠としている研究はバトラー（13件）やパルモア（13件）が多い。

ほとんどの研究はエイジズムを偏見や差別とみなしているが、エイジズムの中のステレオタイプについて言及した研究（奥山 1999, 杉井 2007, 田洪 2009, 二木ら 2016）、高齢者観を形成する要因とする研究（松尾ら 2006）もある。特に、二木ら（2016）の研究では、「暖かいが能力がない」といった両面価値的なステレオタイプを持たれる高齢者に対するエイジズムに着目している。ステレオタイプがエイジズム的な行動意図にどのようにつながるかが解明され、エイジズム軽減方法を考える際に重要な手がかりを提供している。

次に、どのような学問分野においてエイジズムが研究されているかを確かめる。日本のエイジズム研究はケアや支援を提供する看護・介護関連の学生や現場職員がもつエイジズムを主な研究調査の対象にしたものが多く、最も多いのは看護学（9件）で、その次に多い学問分野は社会福祉学（7件）である。その他に、心理学（4件）、社会学（4件）、老年学（3件）、法学、女性学、人文科学における研究もある（表1「学問分野」）。

看護・介護分野においては、ケアや支援を受ける受動的な立場になりやすい高齢者に対する見方がケアに影響を及ぼすものとして指摘されている（小川 2001, 鳥羽 2005）。これらの研究で見られる共通点は、看護や介護に関わる学生や現場職員のなかに否定的な高齢者イメージを必ず発見できることである（鳥村 2002, 三澤ら 2006, 田洪 2009）。また、社会福祉学においては、エイジズムは高齢者観（鳥羽 2005, 松尾ら 2006, 関根 2009, 手島 2015）、高齢者イメージ（鳥村 2002, 南 2004）、高齢者の社会経済的地位（山田 2003）という視点で議論されている。社会福祉学におけるエイジズム研究は、高齢者の人権保障を軸として、実態の把握や改善に向けた研究を行っている。

最後に、研究目的と方法に関しては、エイジズムの特徴を分析することを研究目的とするものが21件で最も多く、そのために日本語版FSA⁽¹⁾（全体の4割、12件）やFAQ⁽²⁾などを用いた調査が行われている。その他は、理論や文献による論考（8件）、イメージに関する自由記述（4件）の結果を分析している（表1「研究目的および方

法)。

具体的な内容については、日本のエイジズムがどのような特徴をもっているかに関する意識調査および分析（原田ら 2004, 杉井 2006, 関根 2010, 久木原ら 2012 A ; 2012 B ; 2013), 自由記述を通して調査対象者がもっている高齢者イメージの分析（島村 2002, 三澤ら 2006, 清水 2007, 田洪 2009) が行われている。そして、FAQ をもって高齢者についてどれほどの正しい知識をもっているかを確かめるものもある（奥山 1999, 南 2004)。その他には、エイジズムの哲学や思想に関する論考がある（松尾 1999, 山田 2003, 浅田 2006)。

上記の結果からは、日本のエイジズム研究は個人の差別や偏見に注目していることがわかる。しかし、エイジズムはパルモア（2002:22-26) が指摘したように、社会・文化的損失を生み出す影響力をもつ。したがって、エイジズムは個人のレベルを超え、社会全体に影響するものである。さらに、エイジズムは一人歩きしているものではなく、社会や文化の影響を受ける概念であることはすでに指摘されている（パルモア 2002:113-162)。これに関連して、山田（2003) はアメリカの高齢者の社会経済的地位の変遷においてエイジズムの発見がどのような影響を与えてきたかについて分析し、そこから得られる日本への示唆を論じることで、日本における初期のエイジズム思想・理論研究としては先駆的なものとして評価できる。その後の関根（2009) や手島（2015) による日本の高齢者観の形成と現状に関する理論的考察は、山田（2003:24) が指摘した「社会の高齢者観研究」に寄与している。

3-2. 得られた研究の成果

次に、エイジズム研究の成果として、エイジズムに影響を及ぼすとされている要因を分析する⁽³⁾。その成果から①エイジズムの特徴、②エイジズムに影響を与える要因を明らかにすることができた。

まず、①日本のエイジズムの特徴について、日本語版 FSA を用いた研究結果から、日本のエイジズムがどのような形であられるかを垣間見ることができる。日本語版 FSA を作成した原田ら（2004) の研究では、嫌悪・差別、誹謗が有効な因子として浮かび上がった。その後の日本語版 FSA を用いた研究結果からは、偏見をはじめとした否定的な思い（迷惑、他人事、嫌悪、蔑視) や行動（無視、忌避、拒否、差別、回避、誹謗) などが確認された（杉井 2007, 久木原ら 2012 A ; 2012 B ; 2013)。

次に、②エイジズムに影響を与える要因の分析結果から、各要因とエイジズムの関係、要因の分類を行った。具体的な作業は以下のように行った。例えば、「高齢者と実際に関わりを持つことが、…エイジズムを弱くする経験となっていた」という結果から、「高齢者との関わり」を「エイジズムを弱くもたせる傾向にある要因」とした（佐

表2 エイジズムに影響を及ぼす要因

カテゴリー	エイジズムを強くもたせる傾向にある要因	エイジズムを弱くもたせる傾向にある要因
経験	祖父母との同居経験	高齢者との関わり ライフヒストリー経験 認知症高齢者看護体験 ボランティア経験
認識	実体性（高齢者を集団としてみること） 自分の加齢を実感・意識	高齢者に対する肯定的イメージ 自分の老いの受容 高齢者に関するメディア情報に対する否定的な態度
知識	高齢者に関する知識	研修機会
感情	感染症脅威	老後生活に対する不安感 自尊感情
基本属性	地域（大都市） ケア関連職歴（長） 生活のゆとり（有） 自分の健康状態（良） 年齢（高年齢） 性別（男） 学歴（高い）	生活満足度（高い）
他者との関係	介護職員のストレス	積極的な社会活動参加 人間・夫婦関係

出所：筆者作成（下線：研究によって結果が相反する要因）

野ら 2010: 15)。一方、「感染症脅威は高齢者偏見を増加させる」という結果から、「感染症脅威」を「エイジズムを強くもたせる傾向にある要因」とした（石井ら 2015: 246）。さらに、要因間の共通する特徴をもとに、経験、知識、感情、認識、基本属性、他者との関係の6つのカテゴリーに分類した（表2）。

エイジズムに影響を及ぼす要因には、高齢者との関わりや同居経験の有無、看護やボランティアの経験、高齢者に対するライフヒストリー経験などに関する研究結果が最も多かった（島村 2002, 杉井 2007, 佐野ら 2011, 久木原ら 2012 B）。このことから、高齢者との関わりや接触がエイジズムに影響を及ぼしており、「祖父母との同居」以外は高齢者と関わりをもつ方がエイジズムを低くもつ傾向にあることが明らかにされた。

その次に、高齢者や老いに対する認識内容が多く指摘されている。このことから、図1で提示したエイジズムの構成概念の中の認知（ステレオタイプ）がエイジズムにおいて重要な役割を果たしているといえる。これに関連して、老いや高齢者に対して受容あるいは肯定的であることはエイジズムをもたない傾向がみられた（三澤ら 2006, 松尾ら 2006, 関根 2010）。二木ら（2016）の研究は、高齢者を集団としてみること（実体性）がエイジズム的なステレオタイプを強めることで、高齢者を集団としてではなく個人として捉えることがエイジズム的なステレオタイプをもたないようにさせる可能性を示した。

また、メディア情報との関連でメディアにおける高齢者の取り上げ方を指摘した研究がみられる（奥山 1999, 島村 2002, 二木ら 2016）。これらの研究は、エイジズムへのメディアの影響力が強いことを指摘しながらそれについて批判的な立場をとっている。

さらに、調査対象者の他者との関係（人間・夫婦関係、社会活動参加程度）がエイジ

ズムに影響する有効な要因として明らかになっている結果（関根 2015）は、新たなエイジズム軽減・克服への手がかりを提供していると評価できる。

3-3. 残された研究課題

最後に、先行研究で指摘された研究課題を分析する。この分析を通して、残された研究課題を明らかにし、今後の研究で行われるべき作業分野を確認したい。

先行研究で指摘された研究課題には、エイジズムの理論的検討から社会における実態分析、エイジズム克服のために求められる取り組みについてまで多様な指摘がなされている。これらの指摘された研究課題を表2のカテゴリーの結果に合わせて分類してみると表3の通りである。

もっとも多いのは認識関連の研究課題である。これらの指摘された研究課題は、自分もっている老いや高齢者に対する態度、考え方を認識する必要性を主張し（鳥羽 2006, 松尾ら 2006, 御園ら 2016）、メディアにおける高齢者の取り上げ方を見直すことを求めている（南 2004, 二木ら 2016）。さらに、高齢者による自己イメージの主観的評価（山田 2003）、画一的な高齢者イメージから脱皮し多様な高齢者像の創造が求められている（吉田 2004, 鳥羽 2005）。

特に、三澤ら（2006: 87）は、看護学生が自由記述した高齢者イメージを分析し、今後の課題として、高齢者イメージ形成要因の分析とともにイメージがどのように変化しているのかを縦断的・横断的に明らかにする必要があると指摘している。上記のように高齢者イメージや高齢者観・像の分析を指摘している研究が少なくないことから、高齢者イメージに関する分析がエイジズム研究において重要な研究課題であるといえる。

表3 先行研究で指摘された研究課題

分類	指摘された研究課題
認識関連	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分が高齢者に対する態度・考え方への認識（鳥羽 2005） ・ 多様な高齢者像の創造（吉田 2004, 三澤ら 2006） ・ メディアにおける高齢者の取り上げ方を見直し（南 2004, 二木ら 2016） ・ イメージが高齢者観を形成することに注目（松尾ら 2006） ・ 高齢者の自己イメージの主観的評価（山田 2003） ・ 社会の高齢者観研究（山田 2003, 南 2004, 松尾ら 2006, 手島 2015） ・ 加齢現象を受け入れることができる老いの積極的な意味探求（松尾ら 2006, 御園ら 2016）
知識関連	<ul style="list-style-type: none"> ・ エイジズム発生・生成のメカニズムやモデルの検討（関根 2015） ・ 教育カリキュラム内容への考慮（久木原ら 2012 B）
経験関連	<ul style="list-style-type: none"> ・ 世代間理解促進の装置の必要性（南 2004, 手島 2015）
そのほか	<ul style="list-style-type: none"> ・ 肯定的エイジズムに注目（三澤ら 2006） ・ 生産性からの解放（関根 2009） ・ 社会の高齢者待遇内容の検討（山田 2003, 南 2004, 松尾ら 2006）

出所：筆者作成

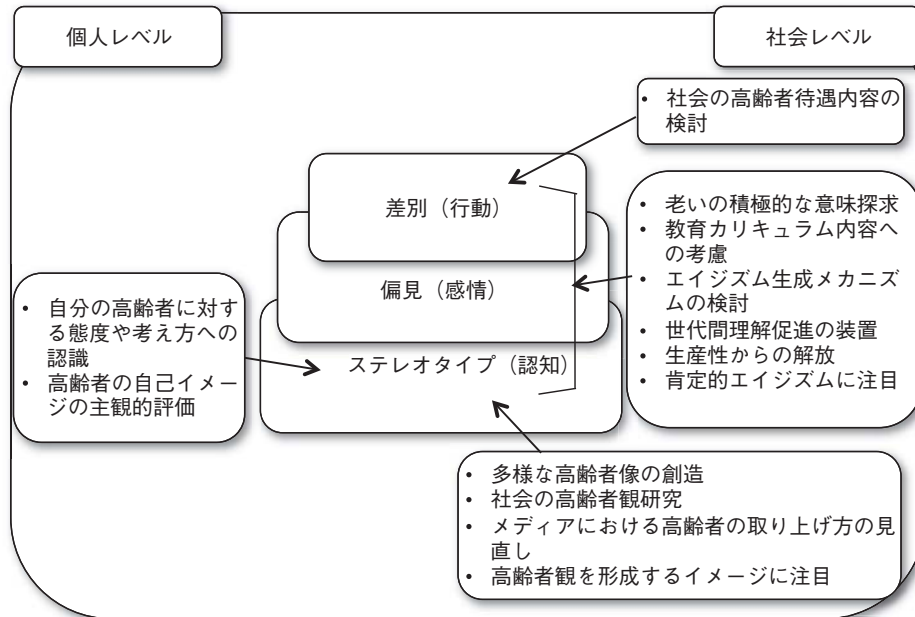


図2 エイジズム構成概念からみた今後の研究課題

出所：筆者作成

経験に関連しては、高齢者との関わりがエイジズムに影響を及ぼすことから、「世代間の理解促進のための装置」が必要とされている（南 2004, 手島 2015）。次に、知識に関連しては、エイジズム生成モデルの検討（関根 2015）、社会の高齢者観研究（山田 2003, 南 2004, 松尾ら 2006）の必要性が指摘されている。

これらの研究課題から、今後、エイジズム構成概念のどの点に注目して研究する必要があるのかを確かめるために、前掲の図1のエイジズム構成概念図に上記の研究課題を照らし合わせてみた（図2）。

先行研究において指摘された研究課題は、個人レベルおよび社会レベルに関わる課題に大きく2つに分類することができた。まず、個人レベルにおいては、「自分の高齢者に対する態度や考え方への認識」、「高齢者の自己イメージの主観的評価」が必要とされており、これらは高齢者に対する「認知（ステレオタイプ）」に関するアプローチである。「3-1. 研究の全体傾向」で述べたように、日本では個人の差別や偏見に焦点を当てたエイジズムの研究がなされてきており、エイジズム構成概念のなかのステレオタイプに関しては研究が乏しい状況である。よって、個人レベルにおけるステレオタイプに注目した研究の必要性が指摘されていると考えられる。しかし、これらの研究課題は2000年代の初頭に言われているにもかかわらず、今日もこれに関連する研究が十分にされていない。

次に、社会レベルにおいては、より多くの研究課題が残されている。エイジズム構成

概念全体に関わる研究課題として、社会全体のシステムにも関連する「世代間理解促進の装置」や「生産性からの解放」などといったものが必要とされている。これらは、エイジズムの克服のために求められる社会変革でもあるため、多様な学問分野が連携した研究、そこから得られた研究成果を教育カリキュラムなどに反映させることが必要であると考えられる。

他に、エイジズム構成概念の個別要素に関しては、社会における高齢者に対する「行動（差別）」に関連して「社会の高齢者待遇内容の検討」が山田（2003）、南（2004）、松尾ら（2006）によって指摘されており、具体的な差別実態の把握が求められている。さらに、ステレオタイプ（典型的なイメージ）を構成する個別イメージに注目し、ステレオタイプ化された高齢者像を乗り越えた多様な高齢者像の創造が求められている。具体的な研究方法に関しては「メディアにおける高齢者の取り上げ方の見直し」が継続して指摘されており、今後の研究においてこの点に注目する必要性が高いことがわかる（南 2004、二木ら 2016）。

個人レベルであれ社会レベルであれ、エイジズムの構成要素のなかで最も多く指摘された研究課題は、「認知（ステレオタイプ）」に関連したものである。特に、「社会の高齢者観」の研究に関しては、2000年代初頭から最近（2015年）まで続けて指摘されており、重要な研究課題であることがわかる。

しかし、このように継続して指摘されてきたにもかかわらずこれに関する研究がなされていないことから、社会における高齢者像やイメージの分析がエイジズム研究における最も優先されるべき研究課題であることがわかる。上記のことを踏まえ、ステレオタイプやイメージに焦点をあてメディアを研究の題材とすることが、今後の研究を進めるにあたって取り組むべき重要な点であるといえる。

4. 考 察

考察では、前章の内容を含めて文献レビュー結果から、エイジズム研究の到達点と今後の課題の整理を通して指摘できる不十分な点について論じる。それを踏まえて、本稿の目的である、エイジズム研究における課題を指摘する。さらに、筆者の研究関心であるエイジズムが存在し続ける理由について述べる。

まず、日本のエイジズム研究の到達点は、多様な個人がもつエイジズム意識に関する基礎データが蓄積されていることである。これらのデータは、看護・介護の教育や研修内容に含まれるべき内容を工夫するうえで重要な役割を果たすだろう。

エイジズム意識に関しては、個人がもつエイジズム意識や知識を調査する研究が全体の65.6%（21件）を占めており、調査対象も看護・介護に関わる学生（12件）や職員

(3件)から一般市民(6件)まで広いため、その結果から全体的なエイジズム意識の整理ができる。特に、調査結果から得られた「高齢者との関わり」「高齢者に対する肯定的イメージ」「老いの受容」などといったものは、エイジズムをもたせないために目指すべき目標として提案できる。

しかし、不十分な点として、エイジズムの定義がバトラーやパルモアに依拠することにとどまっており十分な吟味がなされていない点、ミクロレベル(個人、ケアに関わる専門職や学生)のエイジズム意識・知識の調査・分析研究以外の方法による研究が乏しい点、「社会の高齢者観研究の必要性」「メディアによる高齢者の取り上げ方の見直し」が研究課題として継続して指摘されている点があげられる。これらの不十分な点から、以下の3点の重要な研究課題が浮かび上がってくる。

第一に、エイジズムがいかに関生成されるかを含むエイジズム全体の理論的考察が必要である。現在の研究には、エイジズムの定義からわかるように偏見と差別に問題関心が集中しており、依拠する研究がエイジズム研究の初期のものにとどまっている。また、エイジズムに関する定義や概念が十分に議論されていないことは、その実態をわかりにくくする。当然ながら、エイジズムに関する関心を低くさせる。

本稿で提示した図1からわかるように、エイジズムはステレオタイプ、偏見、差別を全て含む概念であるため、これらの全てを網羅した研究を行うべきである。そのためには、エイジズムに関するバトラーやパルモア以降の研究に目を向けるとともに、日本独自のエイジズム理論の構築に向けての努力が求められる。このような研究が行われることで、現実にあるエイジズムに対する理解を深めると同時に、克服に向けての取り組みも具体的に提示することができると考えられる。

第二に、社会・文化との関係という視点からの研究が必要である。前述したように、個人や個別要因に関する分析が盛んに行われている一方で、社会や文化との関連・関係に関する研究は乏しい。これについては、海外の先行研究においても同じことが指摘されており、日本だけの研究課題ではないことがわかる(Iverson 2009)。

よって、すでに先行研究で指摘された、社会の高齢者待遇の内容、高齢者観、メディアにおける高齢者の取り上げ方などといった社会・文化的側面に焦点を当てた研究が行われるべきである。このような視点からの研究は、ミクロ(個人)レベルにとどまりやすいエイジズム研究の限界を克服することができる。

第三に、多様な研究方法・プロセスの開発が必要である。特に、メディアにおける高齢者の描き方の問題および影響については日本だけでなく海外でも取り組むべき重要な課題としてあげられているものの(南 2004: 12, 二木ら 2016: 88-89, Berger 2017: 194-195), それについての本格的分析は行われていない。三澤ら(2006)が指摘したように、社会の高齢者観に関する縦断・横断的分析が可能であれば、エイジズムへの理解が

さらに深まり克服するための取り組みを考えることにもつながる。

具体的には、メディアにおける高齢者の描き方の歴史的な変化の把握、そこにあるステレオタイプ化された高齢者像を分析することが考えられる。このことは、エイジズムの具体的例として提示することができ、現実に存在するエイジズムを把握する上で有効な方法であると考えられる。

最後に、筆者の研究関心であるエイジズム存続の理由について述べておきたい。「1. なぜエイジズム研究なのか」で述べたように、ステレオタイプはエイジズムの出発点としてとらえることができる。ステレオタイプは、個人や特定集団に対する意思決定や差別的行動の根拠あるいは合理化に作用し、内面化され、低い自尊感情、意欲の低下、自信喪失をもたらす (Allport 1954 : 1968, Aronson ら 2013, Steele 2010)。

このようにステレオタイプは人間の思考や生活の営みなどあらゆる場面において否定的な影響力を及ぼしており、筆者の研究関心であるエイジズムの存続理由としてステレオタイプの働きは看過できないものである。レビューの結果、エイジズムの中でもステレオタイプおよび高齢者のイメージが十分に研究されておらず、研究課題として残されていることが明らかになった。これらのことを踏まえて、エイジズム研究において、ステレオタイプはエイジズム存続理由として非常に重要な概念であり、それに注目し研究することは必須な作業であると主張したい。

本稿は、日本のエイジズム研究がエイジズム構成概念のどの点に焦点を当てているかを明らかにし、学問分野別傾向、研究目的および方法を分析した。さらに、その成果や残された研究課題の考察を通して、①エイジズムの理論的考察、②社会文化との関係からの分析、③多様な研究方法の工夫が必要であることを提示することができた。また、ステレオタイプがエイジズム存続の理由として考えられ、非常に重要な研究課題であることがわかった。これらの結果を踏まえて、社会文化からみられるエイジズムの中でも高齢者に対するステレオタイプを分析することを筆者の次の研究課題としていきたい。

これらの三つの研究課題への取り組みは、ミクロレベルでの調査や研究結果では得ることができなかった社会とエイジズムの関係について考察することができるため、エイジズムへの理解を深めることを可能にする。さらに、我々が気づいていない高齢者に対するステレオタイプが日本の社会・文化にいかに関与しているかを確かめることができると考えられる。

注

- (1) 誹謗、回避、差別に関連する質問項目によって構成された Fraboni Scale of Ageism (FSA) を、日本においても用いることができるように因子分析などを行い日本語版 FSA 短縮版が作成された (原田ら 2004)。
- (2) パルモアによって考案された加齢の事実に関するクイズ (The Facts of Aging Quiz) である (パルモア

2002: 317-323)。

- (3) 表1の文献リストの4, 5, 9, 13, 14, 16, 17, 20, 21, 23~32を主な対象とする。これらの研究は、文献・資料などから得られた成果、意識調査結果から統計的に有効な要因を抽出した結果などが得られるものである。

参考文献

- 浅田訓永 (2006) 「年齢差別問題と憲法—アメリカの年齢差別禁止法と『反エイジズム』思想を手がかりに」『同志社法学』58(5), 1893-1940。
- 池上知子 (2014) 「差別・偏見研究の変遷と新たな展開—悲観論から楽観論へ」『教育心理学年報』53, 133-146。
- 池田啓子 (2001) 「反エイジズムのエイジズム」『社会科学』67, 43-60。
- 石井国雄, 田戸岡好香 (2015) 「感染症脅威が日本における高齢者偏見に及ぼす影響の検討」『心理学研究』86(3), 240-248。
- , 田戸岡好香 (2016) 「感染症脅威が高齢者に対する潜在的偏見に及ぼす影響 (1) —准看護学生を対象とした検討」『清泉女学院大学人間学部研究紀要』13, 13-23。
- 牛島慎之亮 (2011) 「年齢を理由とする偏見・差別を考える授業の開発」『授業実践開発研究』4, 27-36。
- 奥山正司 (1999) 「エイジズム—高齢者へのステレオタイプ」『現代のエスプリ』384, 109-118。
- 小川妙子 (2001) 「看護学生の高齢者へのエイジズム—1年生と3年生のFAQの比較」『順天堂医療短期大学紀要』12, 35-45。
- 久木原博子, 山口みどり, 内山久美 (2012 A) 「高齢者ケア施設職員の職業性ストレスとエイジズムの関係」『インターナショナル nursing care research』11(3), 11-19。
- , 安藤満代, 内山久美 (2012 B) 「高齢者ケア施設・療養病棟に勤務している職員の高齢者に対する知識とエイジズム」『インターナショナル nursing care research』11(1), 13-21。
- , 内山久美, 二重作清子 (2013) 「青年期にある人のエイジズムに関連する要因」『看護・保健科学研究誌』13(1), 57-64。
- 小松秀雄 (2002) 「現代社会におけるエイジズムとジェンダー」『女性学評論』16, 23-42。
- 佐野望, 檜原登志子, 赤枝寛子 (2010) 「看護学生の高齢者の知識の理解と看護の学びによるエイジズムの関連—高齢者看護学実習1の学習効果」『共立女子短期大学看護学科紀要』5, 7-16。
- , 檜原登志子 (2011) 「看護学生のエイジズムと高齢者看護学実習との関連—病院実習と福祉施設実習の学習要素からの検討」『共立女子短期大学看護学科紀要』6, 1-10。
- 島村逸子 (2002) 「大学生のお年よりイメージとそれを生み出す背景」『立正社会福祉研究』4(1), 1-13。
- 清水裕子 (2007) 「看護学生の老年者との対話の問題と特徴」『老年看護学: 日本老年看護学会誌』11(2), 56-63。
- 関根薫 (2009) 「成熟主体としての高齢者観に関する考察—生産性を基軸としたエイジズムからの脱却を中心に」『皇学館大学社会福祉学部紀要』12, 119-130。
- (2010) 「現代日本におけるエイジズムと関連要因に関する考察」『人間学研究』9, 27-36。
- (2015) 「家族および社会関係がエイジズムに及ぼす影響についての考察」『皇学館大学日本学論叢』5, 93-106。
- 杉井潤子 (2007) 「エイジズムの構造と生成要因」『現代の社会病理』22, 155-170。田浜あづさ (2009) 「看護学生におけるエイジズムと高齢者の援助に対する思い」『東北福祉大学研究紀要』33, 441-452。
- 手島洋 (2015) 「日本の高齢者観の形成と現状」『人間と科学: 県立広島大学保健福祉学部誌』15(1), 23-34。
- 鳥羽美香 (2005) 「エイジズムと社会福祉実践専門職の高齢者観と実践への影響」『文京学院大学人間学部研究紀要』7(1), 89-100。
- 二木望, 渡辺匠, 櫻井良祐ほか (2016) 「実体性が両面価値的な集団への行動意図に及ぼす影響: エイジズムに着目して」『社会心理学研究』32(2), 81-91。
- 原田謙, 杉澤秀博, 杉原陽子ほか (2004) 「日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成—都市

- 部の若年男性におけるエイジズムの測定』『老年社会科学』26(3), 308-319。
- , 杉澤秀博, 柴田博 (2008) 「都市部の若年男性におけるエイジズムに関連する要因」『老年社会科学』29(4), 485-492。
- 松尾真佐美, 谷口幸一, 西村昌記ほか (2006) 「高齢者福祉施設職員の高齢者観とその関連要因」『東海大学健康科学部紀要』12, 15-26。
- 松岡広路 (1999) 「エイジズムをめぐる高齢者の学習メタモデルの構築をめざして」『日本の社会教育』43, 109-120。
- 三澤久恵, 佐野望 (2006) 「看護学生がいただく高齢者イメージの分析－祖父母との同居が与える影響とエイジズムの視点」『国立女子短期大学看護学科紀要』1, 81-88。
- 御園一成, 杉澤秀博 (2016) 「日本人成人の高齢者の性に関する知識」『老年学雑誌』6, 25-37。
- 南彩子 (2004) 「エイジズム：その意味と大学生への調査に見る高齢者差別意識」『天理大学人権問題研究室紀要』7, 1-14。
- 山田裕子 (2003) 「20世紀アメリカ合衆国における高齢者の社会経済的地位の変遷－エイジズムの克服と公民権運動」『評論・社会科学』70, 1-29。
- 吉田和子 (2004) 「高齢社会の問題が照射する新たな生活創造の課題－エイジズムとセクシズムの視点」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』53(1), 163-176。
- Ashton Applewhite (2016) *This Chair Rocks: A Manifesto Against Ageism*, Networked Books New York.
- Claude M. Steele (2010) *Whistling Vivaldi: And Other Clues to How Stereotypes Affect Us*, W W Norton & Co Inc.
- Elliot Aronson, T. D. Wilson & R. M. Akert (2013) *Social Psychology, 8th Edition*, Pearson Education Inc.
- Erdman B. Palmore (1990) *AGEISM: Negative and Positive*, Springer Publishing Company, Inc. (=アードマン・B・パルモア (2002) 『エイジズム』明石ライブラリー)。
- Gordon W. Allport (1954) *The nature of prejudice*, Mazal Holocaust Collection (=G. W. アルポート (1968) 『偏見の心理』培風館)。
- Jodi A. Wilkinson & K. F. Ferraro (2002) Thirty Years of Ageism Research, Todd D. Nelson Ed., *AGEISM: Stereotyping and Prejudice against Older Persons*, The MIT Press.
- Maryann Fraboni, R. Saltstone & S. Hughes (1990) The Fraboni scale of ageism (FSA): an attempt at a more precise measure of ageism, *Canadian Journal on Aging*, 9(1), 56-66.
- Nancy J. Osgood (1992) *SUICIDE IN LATER LIFE: Recognizing the Warning Signs*, Lexington Books. (=ナンシー・J・オズグッド (1994) 『老人と自殺：老いを排除する社会』春秋社)。
- Raqota Berger (2017) Aging in America: Ageism and general attitudes toward growing old and the elderly, *Open Journal of Social Sciences*, 5, 183-198.
- Robert N. Butler (1975) *Why Survive?: Being old in America*, HARPER & ROW (=ロバート・バトラー (1991) 『老後はなぜ悲劇なのか？アメリカの老人たちの生活』メヂカルフレンド社)。
- Robert Brown (1995) *Prejudice: Its Social Psychology*, Oxford: Blackwell Publishers (=R・ブラウン (1999) 『偏見の社会心理学』北大路書房)。
- Thomas N. Iversen, L. Larsen & P. E. Solem (2009) A Conceptual analysis of Ageism, *Nordic Psychology*, 61(3), 4-22.

Review of Japanese Ageism Research : Focusing on the Structure of Ageism Concept

Hyebin Park

The purpose of this paper is to review the research on ageism study in Japan. First, we examine the total tendency of the advanced researches on ageism. Second, we identify the outcomes and remaining issues by reviewing with the analytical framework made by components of ageism. As the result of our analysis, we found that data about various individuals' views toward aging have been accumulated. Theoretical consideration about ageism, however, is insufficient. Perhaps as a result of it, Japanese researches on ageism tend to limit their research focuses only to psychological aspects, but not societal and cultural aspects. It is suggested that research on ageism should have more comprehensive research framework with cultural and societal aspects as well as individual psychological aspects.

Key words : Ageism, Attitudes toward the elderly, Stereotype, Prejudice, Discrimination